

通航一覽見

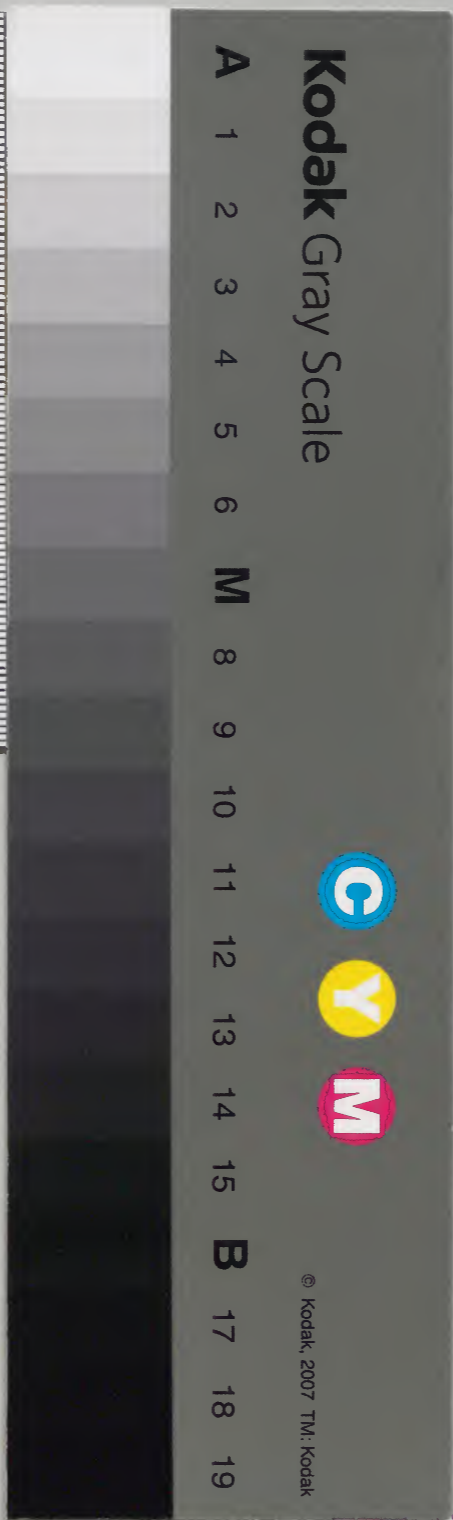
二十二

庫文閣内		和書類	
三八函	二大架	三五三八一	



内閣文庫	
番號	和 35381
冊數	26 (22)
函號	178 444

共廿四



周 139

通航一覽卷之二十三

陸路航路

陸路

一覽

通航一覽卷之二十二

琉球國部二十二

目錄

一 唐國往來

通航

琉球國部二十二

覽卷之二十二

唐國往來



按より琉球事畧より琉球の漢より
 通也一ハ我文中元年明の洪武元年明の
 招諭より七月中山山南山北の三王各使
 一胡貢一封爵の事と述べてより始り
 我弘和三年明の洪武十六年明の勅令文冊を
 三王に授く是より三王皆明朝の藩属と
 嗣より冊封使等の事あり中山王尚巴志
 山北と并せて明より冊封の事あり
 尚思建文の時我宝徳二年明の景泰元年より
 一夏胡貢一貢使百六十人より一より一

あつて諸国よりいふ事をも冊封は爲のこころを貢ハ
別進貢船接貢船ありて渡海せよと云ふ事ハ
は下の正徳年中將津氏より琉球より尋問の條小
あつて但し琉球は本邦の屬國なる小かく漢土小
往來せしげ、其ある事のみならず其のみならず
小西舟より彼土に隣り薩摩よりしき海と隔
つてハ其勢實よと云ふ事といふ事と
以て臨し許さる事ありある事あり

慶長十一年九月鴻津少将家久より
之以琉球小渡來せし明の冊封使小
書牘と稱すその高船薩摩小渡來て
通商せん事と云ふ事
この事一明の萬曆三十
二年の事中山王尚寧

冊封の対し一々正使夏子陽副使三禮あり同日二年福来
省泉州府の高船薩摩に入津以去れ
東照官御代よりいふ事一々唐船渡來通商
の事記録し思えし事慶長六年あり

慶長十一年九月

呈大明天使書

日本國薩摩州刺史藤原家久謹上書

大明國天使西老大人鈎座下 伏以天

使奉

詔命不憚萬里鯨波遠至琉球小嶋我雖

未接光霽望盛德於千里之外矣先是華
人茅國科在朝鮮與日本者三四年矣我
恭敬

皇朝之餘遣船并差喜右衛門尉送還於
中華之地未審國科勇健否迄今令人起
此思矣今幸官船招喜右衛門尉忻甚忻
甚想是兩地不通高舶者三十餘年頗為
慊矣恭惟天使西老大人感我恭順之誠

自今以往年年使中華高舶來於我薩

摩州阜通財賄何幸如之然則

皇恩德澤當永矢而弗諼矣謹此拜獻金
屏二双小篋三重二箇伏乞各各笑納臨
楮不勝瞻戀仰祈尊照不宣

日本慶長十一年九月日 藤原家久

國朝日記

慶長十六年亥年琉球國中山王尚寧

薩摩國と出く本國へ帰ふこれ

東照官

仁徳院殿よりとの恩免ありしうつ明皇

よりと清く取ありしよりてあり

徳川中山王
朱印の條より

比時清津少将家久渡唐船の事と

尚寧より達す

清津家より中山王へ渡す書付の内

毎年渡唐船の候時にお遠く故海路不易の

乃自今以後も以昔様船政にお定着時分

ちつては渡唐又帰帆仕りておをを科の

事

薩州若島傳代但し全文は
中山王朱印の條よりあり

享長十八癸丑年少将家久仰哉等し

中山王尚寧に命し書と福建軍門

小徳よりせ日本明朝互市ありと

しむる後家久の父宰相入道惟新よりし

尚寧小書續と續のよき生成否と尋問

せし終り事調ひ吳西日記載尚寧の書

とありて發せしは嘉永十八年ありしなり法々琉球國志畧
等小尚寧よりし事と彼西に違をて万曆四十年
十月とて万曆四十年と嘉永十七年
ありとれも今吳西日記小後

先年按嘉永十七年元和七年六月十二日條
載せし故に先年とあり薩摩より

琉球(書)の案と老大明(如此書)と老山(と

中老山)と琉球より如此書大明(老山)の

子は不成よりありし書案板倉伊賀守殿

の内怨菴持山と伊州は乃見山此書の心も
唐の勅令調度との文云あり右の書案と
老山一筆如た

與大明福建軍門書

中山王尚寧上書

大明國福建軍門老大人閣下恭審小邦

去

日本薩摩州者僅三百餘里以故三百年

來以時獻不腆方物修其隣好頃有不
肖番夫緩其負期是故薩摩州進兵於
小邦小邦荒墟者誠天之所命而我亦
以無苞桑之戒也不幸而為其俘囚在
薩摩州者三年矣州君家久公外好武
勇內懷慈憫待我以待貴客之禮禮遇
之厚者三年一心加之送還我於小邦
於是吾民之歌於市拊於野者茲非幸

歟州君寄言於我其言曰夫邦國在四
方也有金玉者或不足乎錦繡有粟米
者或不足乎器皿若有餘而不散不足
而無聚民用不足而其貨亦腐惟坐而
待腐不如通其有無各得其所矣

日本非無金玉器皿其土宜質素而不及
於中華之文質彬彬是故使我參謀於
兩國一以使

日本高船許以容之

大明邊地二以使

大明高船來我小邦交相貿易三以使一

遣使年年通其貨之有無者匪翅富而

國人民

大明亦無為倭寇嚴備兵衛矣三者若無

許之令

日本西海道九國數萬之軍進寇于

大明

大明數十州之隣於

日本者必有近憂矣是皆

日本

大樹將軍之意而州君所以欲通兩國之

志者也伏冀軍門老大人於斯三者許

一於此我小邦大沐

大明之德化且遂

日本風志是亦

天朝恤遠字小之仁心也若然則永守藩
職無生貳心遐方嚮化之念沒世不忘
也伏楮伸鄙忱仰祈尊炤不宣

癸丑春月日

答琉球國王書

名護為遣使上國審聞

國王之操履麗安甚以為快矣且復去歲

小春初六華翰至於今歲暮春之初落予
手矣即開緘拜閱者再三宛如拜尊顏
特闕春溫之笑語耳

貴國政事無小無大因革之損益之而隨
時之宜是皆長久無事之基也至幸至幸
國上卿為參謀遙赴中華之地未審福建
布政司有一顧否念茲在茲想是

國王溫和之氣誰敢色厲乎兩國之和睦

可計日而待也倭國東西無事人民之所
盤礴也今復件件珍貺一一拜受借名護
三寸者也尊炤不宣

暮春二十一

惟新

拜復 中山國王 閣下

以上英國日記 ○按もろふは書牘年代と記されども文意と玩
味とより互市の朱吾と同尋せしむ必定あれしむ小載は
万曆二十年十月尚寧使しし再い胡貢哉
琉球國略
倭國の事と奏もく福建の巡檢丁純嗣

奏しし日本の將琉球しし互市と信し
む琉球既し日本の為小併せしれ其貢物
しし日本の産物あり琉球の心をうらむる處
うらむる中は海道參政石炭國其貢物と驗
しし日本の産物お雜りし其貢物と使入朝の
りしやめ其貢物と計し収めし物多く場つりて
費せしは 自江長十七年の事あり此時治味陸奥
家久中山王に命しし福建の軍門に書し
始しせし日本大明互市の事と信しむその書は
倭南浦より南浦は薩摩の文之といし信されし

可計日而待也倭國東西無事人民之所
盤礴也今復件件珍貳一一拜受借名護
三寸者也尊炤不宣

暮春二十一

惟新

拜復 中山國王 閣下

以上吳國日記 ○按もろふは書牘年代と記されども文意と玩
味しむると五市の朱印と同尋せしむる必定あれども小載は
万曆二十年十月尚寧使ししむる再い胡貢哉
修一帰國の事と奏もと福建の巡檢丁幾嗣

奏ししむる日本の將琉球ししむる五市と信し
む琉球既し日本の為小併せられし貢物
ししむる日本の産物あり琉球の心をしむる志る處
ししむる日本の海道参政石峯國に貢物と驗
ししむる日本の産物お雜りししむる使入朝の
ししむる貢物を計し収めし物多く場つりて
奏せしむる 自江長十七年のしあり此時治津陸奥
家久中山王に命ししむる福建の軍門に書
始ししむる日本大明五市のしと信ししむるの書は
僧南浦兼以南浦は薩摩の文といひししむる

萬曆四十年福建巡撫丁繼嗣奏琉球國使
柏壽陣華等執本國咨本言王已歸國特遣
修貢臣竊見琉球列在藩屬固已有年但爾
來奄奄不振被拘日本即令縱歸其不足為
國明矣况在人股掌之上保無陰陽其間且
今來船方抵海壇突然登陸又聞已入泉境
忽爾揚帆出海去來倏忽迹大可疑今又非
入貢年分據云以歸國報聞海外遼絕歸與

不歸誰則知之使此情果真而貢之入境有
常體何以不服盤驗不先報知而突入會城
貢之尚方有常物何以突增日本物於硫磺
馬布之外貢之齎進有常額何以人伴多至
百餘石此其情態已非平日恭順之意况又
有倭為之驅哉但彼所執有辭不應驟阻以
啓疑貳之心宜留正使及人伴數名候題請
處分餘衆量給廩食遣還本國非常貢之物

一併給付帶回始足以壯天朝之威正天朝

之體章下禮部覆如撫臣言

琉球國志略

琉球事略

正條三丙戌年

明の隆慶元年
清の順治三年

清朝革命の後

明の崇禎十七年思宗崩し、明朝亡し、清の世祖即位あり、

順治と改元し、福王唐王永明王於僊、明曆と改し、

永明王の永曆十三年清の順治十六年中山王尚質

中山王尚書

より、明室令く亡し、使者と通すを要

二子尚書、尚書

二乙丑年是より、記波去小い、多り、

抑留せし、琉球人を清人護送あり

明の懷宗崇禎十七年

自江戸本正條元年より、明朝亡

い、清胡一統、

長崎志

大清順治三年福建平尚賢請封使者與通

事謝必振等至江寧投經略臣洪承疇轉送

入京禮部言前朝勅印未繳未便授封遣通

事往諭

琉球國志畧

享安二己丑年八月二日松平藩摩方方より申て
曰去七月六日福州へ船新風より速某領内へ着
岸仕へ申あり松子承原長海軍所且松平
筑前守と江進へ仕へ申あり右も琉球人吉成
年小^按三^按年^按小^按原^按大^按月^按某^按小^按難^按人^按方^按執^按の
所^按今^按度^按琉^按球^按人^按の^按出^按へ^按唐^按人^按の^按難^按人^按
に成りし輩七餘人^按の^按送^按へ^按稱^按琉^按球^按人^按の^按お^按付

世に世に難風より深松平藩摩方領内山川
に申あり着船するのよき事と江をきき

寛明日記
武門法統拾遺

万治元戊戌年三月十六日大琉球震旦西より攻至
小琉球に之掛申り付藩摩方領内を松平大隅守へ
に成出候と云へ申

蒙史畧記○按さるる小是より先既に法胡へ使を通り
先是に此の力虚脱するに備りたる當時に浮沈あり
ありし事也
姑く申あり



本年三庚寅年 厦門 鄭新

厦門 福建

泉州府の屬漳州ありし鄭新は臺灣を主として琉球を小

書牘を繕ひて日本に送りしに其書及し

大薬等を送入せらるゝと求めらるゝ其便宜

とゆゑみづらひし日本に乞ひし其力を借り

て清胡を伐んとす

從て府に福建有臺灣府
鄭氏援乞頼英風祝

の條より

延宝元癸丑年九月廿二日 松平

少将家久

格をりし小津稱号は先久父家久の使をりし琉球

西の献物と稱しし是は寛文十庚戌年基

津人洋中より清胡貢税の琉球船に

棄掠せし小津より入津の臺灣船より賍浪

と収めりし中山より小場りし小津より

ありし臺灣西より鄭經よりその内年高船と長

隆矣西よりその小舟食と云ふ船はは立し長津に獲還り

長津津の官命とゆゑに船より小賞浪二十貫目と云ふなりし

小物留の琉球人と稱せし七にお首と論しし由帆とす

同二甲寅年鄭經より長津津より書翰とす

琉球人の事小よる中を旨あるかの語子にも返をせよとの
事は序に福建省臺灣府の部海流の條より併せよと
同年に貢船より臺灣人の妨げらるる
辛小に福州より着岸は其の頃靖南
王耿精忠明胡の帰属に福建に據り
使に琉球に琉球を求め琉球より
使札を遣ふ然る精忠既に清胡に降り
しうた其使者法人に捕りて日本又
臺灣に赴りてその責問に遭ふ同

丙午年再び使者を遣はし其故を陳
謝し帰國する事とせしむ

延宝元癸丑年九月廿日琉球國貢税に小
船於大清の地海塘山為賊船に破却依り彼
賊船東寧之輩
按てり小清の順治十八年我寔
文元年鄭成功臺灣の蘭人
を逐く去りて據りて子鄭經の時東寧と改む康熙
二十一年我天和二年經の子鄭克塽清胡に降りて後
臺灣に復せしよし 為過料銀子三百貫目書上
賜中山王仍為使札薩州近使使者品に献上

御日記人見私記
如官日簿抄

延宝元年九月廿六日去戌年琉球へ廻船阿蘭

陀之内 按しる小蘭人の臺灣と逐まし、寛文元年の

アラン陀の内とあるは誤りなり
トニ子イ人奈取し之後トニ子イ人長崎へ入

津し長為色料銀三百貫目公儀に上りて銀

子琉球王に下りて為沙礼薩摩國近從中山王

献上之品

一 太平布 百疋

一 芭蕉布 又拾友

同綾織拾友

一 細布 拾疋

一 縮布 拾友

棉十疋小東日記玉露叢
下代縮緬一疋つくは

一 観摩玉 一双

一 八重山蕨海産 一箱

一 泡盛酒 三壺

右ノ通松平大隅守より以使者瓦上より湯
老中

柳菴日記 卷之九 録問記
東見花玉露叢 三才雜錄

延宝二甲寅年

後琉球國大遣、貢納、船帰帆仕付還、

様子申上、

一 琉球より大遣、貢納、船大小計艘去年一五
三月三日琉球出船小船付同十九日福州、

内閣安堵、申下、着仕、大船、十七日官塘
山、中島、繫、同十八日湊、に、虎門、を志
系、山、中島、定海、中島、より、賊船、大小、十三
艘、漕、出、一、証、大、鼓、を、打、開、一、聲、を、揚、石、火、矢
弓、換、炮、を、射、總、打、う、け、帆、焼、を、擲、う、け、礮、を
投入、山、中、島、琉、球、より、石、火、矢、弓、換、炮、并、て、防、り
後、申、下、右、ノ、船、若、小、ノ、琉、球、を、五、圍、口、方、より
漕、寄、建、安、刀、を、以、て、突、掛、り、琉、球、人、も、建

長刀小く防あゝる湊に心總和を築く事
順風能く荒門近く成中にも有賊船と引退の
琉球船之地廻りて事折破りて船と無恙同
申之刻國安陸へ入津仕の琉球申す士を人
多主に人討死仕の事負上下世に人何事も淺
事申へ死不中なり

一 右海賊と綿舎 按する小鄭家老蕭啓と申者
経の字あり 彼蕭啓當時に結南王へ
之をく者小くゆ座に彼蕭啓當時に結南王へ

随分仕の賊船ありし討死十六人年負十九人
由舟の中承及の先年成の年一琉球負納
船と之の海賊も右蕭啓多し者の中此等
一 旨於福州琉球通事謝必振と申者物語の
事

一 去年三月福州へ着船仕北京へ琉球使者糸勒
之後相向ひて早速可居上旨申出此死
脚踏還り日數押移測同年十月十日琉球

使者名賀志親雲上喜友名親雲友人上下
其人少々福州居住為正月廿日北京へ來着
該山中より我へ共々福州に殘居申の
事

一右福州に殘居の琉球人其相談仕の大法我
至り居成北京に還し通商無由なる北京
居住の琉球に使者福州に居下以後今後
成中居安し我へ福州にいつとあく相約申

俄如何存の第一琉球より七無心許可存の
先我へ大帰帆仕北京に居在の琉球使者に
市に迎給て是れ若右該仕琉球通事謝必
極鄭重に申友人中少の好むに後下
此の若も右通北京へ第一琉球人福州に
達し居下は対し福州に居殘の琉球人其
帰帆の例も此れに等し通し然中申の
結南王(洲張申)起行

一 北京へ糸山琉球使者降下しつゝおくお符
て中免如何しし百福州へ残居し琉人へ先
帰帆へ付し事

一 右北京に在居し使者福州へ降下し別福州
へ由國系へ糸懸しし御通しし後琉球
迎船否越し追福州し事正並し事

一 向後琉人福州へ逗留仕し時分は如跡し不
相替用物賣買御免事成し事

一 後琉球在後し者あはれ先規版米事仰付

下下事

有し通友人へ通事ありし琉球中し事し月
十八日し有し琉球如預し中付し旨結南王
返詞し中守し必此頃兵軍勢さふし抱
置し中し付し糧食つらし中し版米ハ不
し後し事

一 五月二日結南王へ琉球人石家響登意事申し

同日琉球人、一書翰を渡福州に在居琉球人
共付不殘不波帰帆に北京に在居琉球人
使者福州に在居琉球人無口能通福州
不可正並は心安不存中事少同八日結南
王、後人布政司と中人と、傍に官の名あり琉球人
深快に在渡

一琉球通事為人、後在該地、唯今乱に在
成はるが以海賊、有、今從琉球船に渡

後海上氣起、在如何に仕哉、為人、在寄
と、取寄、中、地、為人、通事、中、右、
通乱、中、海賊、氣起、在如何に仕哉、
毎年便宜有、事、万、大清、在、在、
取合、貢納、船、在、越、中、中、安、在、右、通、
約束、帰帆、仕、事

一五月十七日福州、後、在、同、日、琉球、地、着
仕、六月、二日、琉球、那霸、着、船、仕、事

以上

寅 七月廿日

同丁巳年春琉球後唐船の者大中上の覺

一 三月十日琉球船霸津出船仕同廿日唐津口
 小虎門へ走入りて昔船糸いと見ゆり離人小
 づい内へ船子お尋ゆて大津子立歸ゆ中
 中山舟岡安徳(發着船通事と船より下り
 桑岡中達ゆ別去丑の年 按とるに即延宝元年あり下同 進貢

使に交わ尋りて小南系に問は換州と中祈
 在辰中中事

一 四月十日船より官屋へ下ゆり琉通事謝必
 振鄭裴去年上將軍より 按とるに小南系に 琉
 球へ硫磺系と使者陳遊擊事お尋ゆ知り
 彼陳遊擊後琉球より帰帆ゆ長福建上將
 軍後辰九月十九日陪系仕定早福建若難
 大将康親王入城に中福建に内連ゆ録

取及し舟の琉球より上將軍への咨文焼捨
系船荷物并捨し一船より陸へ上り髪を
刺難く脚舟を福建へ服し悉く糸の交連江
際へ所吹際との境へ同昔林寅廷と申すの
足付不審に存擬捕福建按察司と申後人
と申原於彼不穿警の舟上將軍より硫磺を
不申使者琉球へ召越し糸硫磺等へ申す
不取違帰帆の通申しゆも録合申付定て毎時

又付臺灣へ糸の糸と相及穿警の舟琉球へ
糸の右友へハ不糸の中申す何れは控有
く外に中申す舟上將軍より琉球へ召し人数書
為見申すの上浪子三指貫目解る出給候
言教免す、申す事

康熙十二年癸丑代延宝元年と為し申すその以
福建の靖南王大明方舟を清國へ全裁の用
意し琉球へ硫黄を求め小船を遣ししより

琉球よりし使者を相済結南王(書翰)とせし
琉球の使者いす、福建へ到着せざる内、結南
王(書翰)降系申、琉球の使者難魁に滞りし
年と雖も琉球へ不在帰し、延宝六年丁巳の春琉
球より又福建へ船と渡し、その時の使者船中
あり、福建の船子と見え、代船附の昔船の体
皆難魁人あり、由、始、結南王降系あり、
福建も難魁領し、あるを、さう、丑の年

渡海の使者の捕りし、あるを、とせし、
中、延宝四年丙辰の九月結南王(書翰)降系申、
延宝六年の春渡海の琉球人、難魁の体、
中、由、(書翰)の都へ、第一、先年より、
琉球の使者の宛、い、一、前後、
歸、延宝六年、
延宝六年、
琉球の使者の宛、い、一、前後、
歸、延宝六年、

琉球の使者

福建等處承宣布政使司為訪詢

清朝事康熙拾陸年參月貳拾玖日准

琉球國中山王世子尚 咨稱照得

甲寅伍月內前年在閩貢使趨回本

國切切告稱福建靖藩主叛君猾夏

無名出師伏思我祖先王蒙

清朝高恩封立藩王是以與舉國臣民即

慮

朝廷驚動切恐天下煩擾本欲飛越而同

心戮力恨柰海山萬里不能如意耳

為此特遣正議大夫使者都通事蔡

國器毛自彬曾益倪定基鄭明良等

官前詣福省探訪安否移咨貴司請

乞察照施行等因到司准此案照先

為進貢事康熙拾貳年參月貳拾陸

日准

琉球國中山王世子尚 咨開照得
敝國遵依會典兩年一次朝貢查康
熙拾壹年該應循期擬合進
貢不敢愆越為此虔脩方物海舡貳隻
遣官坐駕率領水梢每舡均幫上下
員役共不盈貳百人數解運方物前
赴福建布政司投納轉解赴
京進奉為此遵將常貢煎熟硫磺壹萬

貳千陸百斤馬拾匹海螺殼參千箇
外屨蒙

皇恩無異覆載但敝國窮乏愧無寸報又
將土產紅銅壹千斤大小火爐貳個
絲烟貳百匣等進

上據此合行遣官管解前赴福建布政司
投納外理合脩咨告投今遣耳目官
吳美德正議大夫蔡彬都通事程泰

祚等官賫咨捧

表赴

關外其舡貳隻煩乞移咨轉達

禮部及來夏風汛先賜遣歸而赴京

貢使官伴俟後貢舡隻替換駕歸為

此移咨貴司知會仰祈察照施行等

因到司准此又為進貢事康熙拾貳

年捌月初捌日奉

巡撫都察院劉 案驗准

禮部咨主客清吏司案呈奉本部送

禮科抄出該本部顯覆福建巡撫劉

顯前事內開該臣等議得福建巡撫

劉疏稱琉球國先到貢舡壹隻於竿

塘外洋被賊攻打署閩安副將軍遊

擊化守登官兵出哨引進聽候部議

等語其進

貢人役于竿塘外洋被賊攻打着傷併
官兵出哨引進緣由聽兵部議覆外
據稱琉球國應於康熙拾壹年貢期
拾貳年參月拾捌日至閩將
貢物及來使准其來京其進
貢硫磺留於福建督撫照例收貯臣部
移文工部俟應用處使用至於
貢馬拾匹內壹匹倒斃無容議等因康

熙拾貳年陸月貳拾捌日奉

旨依議欽此欽遵抄部送司奉此相應移
咨前去煩為查照

旨內事理欽遵施行等因到院准此擬合
就行為此備案仰司備照咨文奉
旨內事理欽遵查照等因奉此又為進貢
事康熙拾貳年玖月拾貳日奉

巡部都察院劉

案驗准

兵部咨職方清吏司察呈奉本部送
兵科抄出該本部覆禮部尚書哈
等題前事等因康熙拾貳年陸月貳
拾捌日奉

旨依議欽此欽遵抄出到部該臣等議得
禮部覆福撫劉 疏稱琉球進

貢人役於竿塘外洋被賊攻打着傷併
署閩安副將軍遊擊化守登官兵出

哨引進緣由聽兵部議覆等因查該
撫疏稱閩安鎮左營把總柯美出哨
五虎門瞭見外洋有賊艘拾餘隻與
琉球國

貢舡對敵奪勇架砲攻擊賊舡隨即奔
潰大洋而去引帶貢舡等語又琉球
國都通事程泰祈報稱本國耳目官
吳美德等百餘人前來進

貢至竿塘外洋遇賊船大小拾餘隻前來攻打被賊用砲打死隨伴肆人被傷貳拾餘人本船正在危急幸有閩安鎮官兵船隻出五虎門外巡哨架砲衝打久攻各賊船遂奔逃大洋官兵船隻引進鎮口等語查琉球國進貢船隻在外洋與賊船攻打經出哨官兵遇救引進無有剿獲應無容議等

因康熙拾貳年柒月貳拾參日奉

旨閩安鎮官兵見攻船被賊攻打即前往救護引進可嘉着再議具奏欽此欽遵抄出到部該臣等再議得覆禮部一疏內議琉球國進

貢人役在外洋與賊攻打經出哨官兵遇救引進無有剿獲無容議等因具

顯奉

旨聞安鎮官兵見貢舡被賊攻打即前往
引進可嘉着再議具奏欽此查叙功
之例照武職官員斬獲賊寇多寡議
叙把總柯美並無斬獲賊寇之處不
便議叙相應仍照前無容議等因康
熙拾貳年捌月初壹日奉

旨依議欽此欽遵抄部送司案呈到部合
咨貴院煩為欽遵查照施行等因到

院准此擬合就行備案行司備照咨
文奉

旨內事理欽遵查照施行等因奉此又為
勸請循例體恤柔遠以廣

皇仁事康熙拾陸年肆月拾玖日奉

總督部院郎
巡撫部院場
禮部咨開奉
牌案准

御前癸下紅本該本部密覆福建總督郎

密頭前事內開該臣等議得福建總督郎密頭內開琉球國難彝雜氏等拾貳名照例給口糧銀兩暫為養顯明前未應仍照例給與銀米養又稱該彝既無原來舡隻作何遣回國聽候部議等語查康熙拾參年江寧處撫馬伍因琉球國貢使吳美德等奉

勅歸國途次蘓州因閩省逆賊告變難以前進即於蘓地覓館暫棲俟逆賊蕩平之日令其歸國等因具頭奉

旨該部知道等因在案今應俟福建地方平定日江寧巡撫琉球國貢使吳美德等遣回國頭報到日令其遣奏起程又該督疏稱琉球貢使吳美德等原坐舡貳隻留同來李切銘等任

於閩驛於康熙拾參年伍月內靖藩
打柁回國福建並無存晉舡隻今難
彛雜氏等應俟吳美德等到閩邊界
之日或遇伊國進貢或有來接舡隻
一同帶回伊國若無進貢來接舡隻
將吳美德等并難彛雜氏等令該督
撫酌量撥給舡隻柁回伊國可也等
因康熙拾陸年貳月貳拾陸日密顯

本月貳拾玖日奉

旨吳美德等應即柁往閩省令該督撫酌
議一併登遣回國着再議具奏欽此
欽遵於本日密封到部該臣等再議
得福建總督郎 密疏內稱琉球國
難彛雜氏等拾貳名照例給口糧銀
兩暫為養養顯明前來應仍照例給
與銀米養養又稱該彛既無原來舡

隻其貢使吳美德等原坐舡貳隻同
來李切銘等已打發回國福建現無
舡隻等語今查琉球國貢使吳美德
等現在江南蘇州府臣部移文江寧
巡撫照例沿途撥給驛遞夫役食物
發往閩省應俟吳美德等到閩之日
令該督撫將雜氏等拾貳名一併酌
議如可遣回伊國即速撥給舡隻遣

發如有難以遣發之處該督頭請之
日別議具奏等因康熙拾陸年冬月
初拾日密頭本月拾貳日奉

旨依議欽此欽遵於本日密封到部欽此
相應密咨前去煩為查照

旨內事理欽遵施行等因到部院准此擬
合就行為此備案行司備照咨文奉
旨內事理即便欽遵查照彙詳通報等因

奉此又為稟報事康熙拾陸年柒月
貳拾肆日奉

巡撫部院楊 業驗本年柒月貳拾
肆日准禮部咨開奉

御前奏下紅本該本部密覆福建巡撫楊
顯前事內開該臣等議得福建巡撫
楊 疏稱琉球國彝官蔡國器等坐
舡壹隻到閩臣行藩司驛道查稱該

國世子尚貞差來探問

天朝捷音並接康熙拾壹年貢使吳美德
等歸國帶有執照咨文等語查康熙
陸年拾月內臣部具題嗣後如有彝
文投到

該督撫者即行將原文開閱議題今
該撫將執照咨文開閱而未經議明
具題殊屬不合其來探問

天朝捷音世子尚負非係特行達部咨文
無容議又查本年參月內臣部顯覆
福建總督卽密題一疏內稱琉球國
貢使吳美德等現在江南蘓州府
臣部移文江寧巡撫照例沿途撥給
驛遞夫役食物矣往閩省應俟吳美
德等到閩之日該督撫將琉球國
風飄至雜氏等拾貳名一併酌議如

可遣回伊國卽速撥給船隻遣回如
有難以遣送之處該督題請之日別
議具奏等因具題奉

旨依議欽遵咨行福建總督江寧巡撫在
案今該國既有接收舡隻相應移咨
該督撫將前來貢使吳美德及飄來
雜氏等拾貳名一併速行遣回伊國
通詳速報施行等因奉此又為報明

歸國事奉

巡撫部院楊 批該本呈詳查得進

貢彛官吳美德等并飄風雜氏等遵
奉

部文俟吳美德等到閩之日或遇伊
國進貢或遇有來接舡隻一同帶去
等因今琉球國現差蔡國器等駕舡
來閩接回貢使查吳美德等原赴京

官伴貳拾負名除在獲物故官伴共
參員名已經回閩返國官伴只壹拾
柒員名并飄風雜氏等壹拾貳名接
貢官伴玖拾參員名內摘出存留在
驛官壹員伴伍名實摘回返國官伴
捌拾柒員名以上項返國官伴水梢
通共壹百拾陸員名一同遣送回國
至該彛啓行之日飭行閩安鎮派撥

兵船護送出境以防不虞以示柔遠
者也茲據該廳詳覆造冊前來相應
據轉伏候

憲臺察集批示以便遵行等緣由奉
批如詳俟彛使定有行期先行通報
繳冊存查等因奉此今准前因合將
歷奉部文並貢使跟伴遣回緣由備
叙明白合就咨覆為此理合備由移

咨

貴國請為察照施行須至咨者

右

咨

琉球國中山王世子尚

清朝事

康熙

拾陸年柒月廿一日

咨



右福建道より琉球へ世々伏一通松平大隅守
 所より苗々公儀へ献せり大隅守より右良
 上野介義央写置を信々写す
 以上華夷変遷

